

真のメシア、イエス

(ヨハネ一八・一〜二一)

「なんであんなところに通気口が？」所轄の一刑事のカンが歴史を動かした。一九九五年五月一六日午後、応援に駆け付けた牛島寛昭刑事はゴールデンウィーク中に第六サティアン警備をしていた時に得た「気づき」をもとに第六サティアン内部に潜入した。迷宮のような室内を進み、あの通気口と繋がっているような天井を見つければ、それを壊すと、「メシア」はそこにいた。教団特製の修行用ヘッドギアを装着していた彼は震えおののき、失禁していた。傍らには現金約一〇〇万円と寝袋、そしてスナック菓子が散らかっていたという。これが日本唯一の最終解脱者にして自らをメシアと宣したオウム真理教の尊師、麻原彰晃死刑囚の逮捕の瞬間である。

今朝の箇所はイエスが捕縛される場面であるが、そこに描かれる姿はキリスト宣言をした麻原死刑囚とは全く異なっている。まさしく真のメシアと偽メシアの違いである。以下捕縛された際のイエスの姿から、私たちの主イエスについて思いをはせたい。

一、自らの使命に向かうイエス

ヨハネ福音書のイエスの捕縛の記事は共観福音書とは異なっている。共観福音書ではイエスは捕縛される前にゲツセマネで祈り、父のみ心と自らの思いの間で葛藤する場面が描かれるのに対してヨハネ福音書では御父のご意志との葛藤は描かれぬ。しかしなぜこのような差が生まれたのだろうか。ある学者はヨハネがこのような書き方をするのはイエスを栄光のお方として表したかったからだとするが、それは少々行き過ぎの見解であろう。実際ヨハネ福音書においても一・二・二七あたりにはイエスには父のみ心との間に葛藤があったことが描かれている。こう考えると少なくともヨハネはイエスの葛藤を受難物語のはじめに置きたかったということは確かである(R. E. ブラウン)つまりヨハネはイエスが捕縛される際、彼の心はこれから起こるであろうことについて十分な整理が出来ていたということを示すべたかったのだろう。確かに裏切り者のユダとその一味は武器や明かりを用意し準備万端であった。だがイエスの心はそれ以上に整っていた。だからこそイエスは「だれを捜すのか」と自ら捕縛へのきつかけを作ることが出来、その静かな、しかし威厳に満ちた一言に世の権力は

打ち倒された(六節)。ここには気高い、そして罪なき人間の理想形がある。

二、弟子たちを守るイエス

イエスにとつて自らが捕縛されることは既知のことであり(四節)、また予告していたことであつたが、イエスは弟子たちが自らに殉ずることを良しとはしなかつた。だからこそイエスは敵対する者たちに対し、「もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい(八節)」と言われた。興味深いのは共観福音書では弟子たちがイエスを置いて逃げていったと記述しているのに対し、ヨハネ福音書ではあくまでイエスが弟子たちを去らせたと言っていることである。ちなみにある学者はこれを一〇章における良き羊飼いの記事と関連付け、弟子たち(ユダを除く)が一時的に散らされても、保たれていくのをイエスが見届けることは良い牧者であるイエスの配慮だと論じている。しかし問題が起こった。なんとペテロが大祭司のしもべマルコスに切りかかり、その耳を切り落としたのだ。この行動は勇敢ではあつたが、イエスが受けようとしている十字架の栄光に横車を押しかねないものでもあつた。だからこそイエスはペテロに対し、剣をさやに治めよと厳命し、自らはこの現実を受け入れるべきことを伝え

られた。メシアであるイエスはあくまで人を守るために自らを犠牲にすることをいとわないお方だったのだ。

* * *

あの日本、いや世界を震撼させたカルト教団の始まりはごく小さなヨガのサークルだった。実際集まってきた生徒の多くは健康増進のためという普通の動機で来会したという。しかし師である麻原彰晃の「空中浮遊」以降、そこに超能力願望や宗教性を求める者があらわれ、オウム神仙の会、更にはオウム真理教と名を変える中、尊師、麻原彰晃に絶対の忠誠を誓う宗教集団に変貌した。彼らは麻原を最終解脱者であり、メシア(救世主)であると信じ、教化した。教団の肥大化とともに師は狂った。外部の社会を憎み、弟子たちを数々の悪事に加担させ、多くのいのちを殺めた。そして今、死刑囚となった彼は半ば廃人状態だと言う。麻原彰晃に限らず、人がメシアになろうとした末路は悲惨である。しかしイエスは違う。彼こそは天から下ってきた唯一のそして真のメシアであり、死を目前にしてなおその心は平静で、最後まで弟子たちを愛し、更に今日も当時と同じ愛をもって私たちを愛し、ケアし、救われるお方だ。この人を見よ!